

西周金文に 親しみ、活用 する

—平成 29 年度東京学芸大学
公開講座記録—

下田 誠・佐々木 研太

西周金文に親しみ、活用する
—平成 29 年度東京学芸大学公開講座記録—

目 次

はじめに	(下田 誠)	19
東京学芸大学公開講座〔平成 29 年度〕概要		20
第 1 部 西周史・西周金文入門		
西周史概説	(下田 誠)	22
〔参考資料〕西周史の入門書・概説書（日本語を中心に）		26
西周金文の基本問題	(佐々木 研太)	27
〔参考資料〕西周金文の基本問題		33
西周考古の最新発掘	(山本 堯)	36
第 2 部 西周時代の文字（金文）で年賀状を書いてみよう		
公開講座 午後の部のスケジュール		50
本日用意の工具書、関連サイト		51
公開講座アンケート（集計）		52
おわりに	(佐々木 研太)	53

はじめに

本報告書は2017年（平成29年）8月23日に開催された平成29年度東京学芸大学公開講座「西周時代の文字（金文）で年賀状を書いてみよう」の講座内容と当日配布資料、アンケート集計等から構成される。本講座は、平成29年度新規に開発された講座であり、古代中国に関心を寄せる一般市民・学校教員・学生のために設計したものである。

近年、研究に携わる私たちの実感とは裏腹に中国離れ、歴史離れが進んでいる。筆者が専門とする先秦・秦漢時代は、とくに出土文字資料が陸続と出現し、整理に手が回らない状態が続いている。ある意味、今ほど面白い時代はないといえる資料条件にある。新出資料が増加し、先秦・秦漢の時代像の読み直しも進む段階にあるにもかかわらず、日本の高等教育の現場では、大学院生が減少し、史学科という学科やコース自体が学際的な、または文理融合的なコースに衣替え、または消滅している状態である。中国史を専門に大学の教壇に立つ教員は恐らくは同様の危機感をもっているものと思われる。学問の専門化や個別細分化が進み、研究の最前線では精緻で独創的な研究が発表されているとはいえ、自分たちの学問分野の魅力や面白さを、一般の人びとにわかりやすく、興味深く伝える努力もまた、いっそう求められているのではないだろうか。

筆者はそのような考えを長く持っていたが、本年度よい機会を得るに至った。筆者は、もう5年程同好の士である佐々木研太氏と張政烺批注本に基づき郭沫若『两周金文辞大系』の翻訳作業を続けている。いつ形をみるともわからない遅々とした歩みであるが、西周金文を学びたいという筆者の学部以来の思いに佐々木氏にはつきあっていただいている。今回、西周金文を活用して楽しむ企画を考えたいと佐々木氏と相談したところ、西周金文で年賀状を作るといえるのはどうか、という「斬新な」アイデアに至った。学問ベースで話をすれば、呆れられてしまうかもしれないが、遊び心がなければ人を惹き付けることはできない。幸い、今回の大胆な企画に9名の応募があった。受講者の方には感謝の気持ちしかない。不安でいっぱいのお取り組みであったが、自画自賛とはいえ、初回としては成功といってよい成果があった。すべての受講者が時間内に年賀状の図案を完成させ、お互いに披露するところまでこぎつけた。受講者のアンケートにもあるように、受講者からは満足、達成感がうかがえた。近年、アクティブ・ラーニングが大学においても注目されている。楽しく学び、活用し、身につく、そのような実践に近づけることができたかと考えている。次年度以降の改善・改良のために、本書をまとめることとした。

最後に、本企画を温かく支えてくださった広報企画課の職員の皆様にお礼申し上げます。

東京学芸大学教員養成開発連携センター

下田 誠

東京学芸大学公開講座〔平成 29 年度〕概要

講座名	西周時代の文字(金文)で年賀状を書いてみよう
講座開設の趣旨・目的	本講座は西周時代の青銅器に鑄込まれた銘文(金文)を素材に、西周時代に関する基本事項を学びながら、受講者と共に当時の文字である金文に親しむ機会として、工具書(字書の類)を駆使して、年賀状を作成します。
募集人数	10名(最小実施人数5名) 一般市民・現職教員・学生
会場	東京学芸大学 S 棟 107 教室
講習料	2, 000円
日程等	2017年8月23日(水)10時00分～16時00分 10時00分～10時30分 講 師 下田 誠(東京学芸大学教員養成開発連携センター准教授) テーマ 西周史概説 10時30分～11時30分 講 師 佐々木 研太(東京学芸大学個人研究員) テーマ 西周金文の基本問題 11時30分～12時00分 講 師 山本 堯(東京大学大学院人文社会系研究科博士後期課程) テーマ 西周考古の最新発掘 13時00分～16時00分 講 師 下田・佐々木・山本 テーマ 受講者と字書類を利用して西周金文で年賀状の案を作成する
受講者への連絡事項	ノートパソコンをお持ちの方はご持参下さい。

第1部

西周史・

西周金文入門



2

本日主に対象とする時代 —西周時代—

	『図説中国文明史』	『中国の歴史』講談社	『世界の歴史』中公	『中国の歴史』学術文庫
先史・夏	①文明への胎動	①神話から歴史へ	②中華文明の誕生	古代中国
殷周	②文明の原点	②都市国家から中華へ	〃	〃
春秋戦国	③争覇する文明		〃	〃
秦漢	④雄偉なる文明	③ファーストエンペラーの遺産	〃	秦漢帝国
三国	⑤融合する文明	④三国志の世界	〃	魏晉南北朝
魏晉南北朝	〃	⑤中華の崩壊と拡大	⑥隋唐帝国と古代朝鮮	〃
隋唐	⑥開かれた文明	⑥絢爛たる世界帝国	〃	隋唐帝国
宋	⑦成熟する文明	⑦中国思想と宗教の奔流	⑦宋と中央ユーラシア	五代と宋の興亡
遼西夏金元	⑧草原の文明	⑧疾駆する草原の征服者	⑨大モンゴルの時代	モンゴルと大明帝国
明	⑨在野の文明	⑨海と帝国	⑩明清と李朝の時代	〃
清	⑩文明の極地	〃	〃	大清帝国

西周の歴代王在位年と時期区分

王	年代（紀元前）	年数	時期区分
武王	1046 - 1043	4	早期
成王	1042 - 1021	22	
康王	1020 - 996	25	
昭王	995 - 977	19	
穆王	976 - 922	55（共王当年改元）	中期
共王	922 - 900	23	
懿王	899 - 892	8	
孝王	891 - 886	6	
夷王	885 - 878	8	晚期
厲王	877 - 841	37（共和当年改元）	
共和	841 - 828	14	
宣王	827 - 782	46	
幽王	781 - 771	11	

『夏商周断代工程1996-2000年階段成果報告（簡本）』（世界図書出版公司、2000年、36・88頁）より

西周史の時期区分（代表的なもの）

周王	松井嘉徳	陳夢家	貝塚茂樹	白川静	伊藤道治	佐藤信弥
文王	初周			殷周の際		前半期Ⅰ
武王		初期	初期		前期	
成王				周初の経営		
康王	盛周					
昭王		中期	釁 京辟雍	中期		
穆王	中期					
共王		中周	後期	政治的秩序 の成立		後半期Ⅰ
懿王						
孝王		孝夷期と淮 夷の動向				
夷王						
厲王	晩周	晩期		貴族社会の 盛衰と西周 の滅亡	後期	後半期Ⅱ
共和						
宣王						
幽王						

松井嘉徳「西周史の時期区分について」（『史窓』第68号、2011年、135頁）より一部改

金文とは

西周時代、各種功績を顕彰するため、祖先を祀るため、そして後世まで伝承するために、青銅器にさまざまな言葉を鋳込んだ

殷代にはじまる青銅器の銘文は、西周に引き継がれ、100字以上の長篇の銘文もあらわれる

右上①②：虢季子白盤（金文通鑑14465）
右下③④：禹鼎（金文通鑑01850）

5



6

西周史を復元する代表的な文献史料

- 『史記』周本紀、魯周公世家、宋微子世家、齊太公世家、燕召公世家等
- 古本『竹書紀年』
- 『詩經』国風・雅頌（大雅・生民、公劉、緜、大明、文王有聲、江漢、嵩高、烝民／小雅・六月、十月之交等）
- 『今文尚書』周書（牧誓・金縢・召誥・顧命）等
- 『逸周書』
- 『国語』周語、『春秋左氏伝』
- 三礼（礼記・儀礼・周礼）



左・右：猷鐘（宗周鐘、金文通鑑15339）

金文（等出土資料）からみた西周時代

文献を補う、文献の誤りを正す、文献から知りえない同時代史

西周大事	王代・時期	主要な関連器等	
牧野の戦い	武王	利簋（集成4131）	何尊（集成6014）
三監の乱	成王	清華簡『繫年』第3章	大保簋（集成4140）
成周造宮	成王	何尊	
諸侯封建	康王	宜侯矢簋（集成4320）	
昭王の南征	昭王	過伯簋（集成3907）	史牆盤（集成10175）
厲王の親征	厲王	猷鐘（集成260）	猷簋（集成4317）
共和	共和	清華簡『繫年』第1章	師獸簋（集成4311）
宣王の中興	宣王	頌鼎（集成2827～2829） 兮甲盤（集成10174）	毛公鼎（集成2841） 四十二年逯鼎
西周の滅亡	幽王	清華簡『繫年』第2章	



金文の一例（西周封建の場面—宜侯矢簋）

- 隹四月、辰才（在）丁未、王省珽（武）王・成王伐商図、延省東或（国）図。王立于宜、入社南卿（嚮）。王令（命）虞侯矢曰、「繇、侯于宜、易（賜）●鬯一卣・商瓚一□・彤弓一・彤矢百・旅弓十・旅矢千。易（賜）土、厥川三百□、厥□百又廿、厥宅邑卅又五、厥□百又卅。易（賜）才（在）宜王人十又七生（姓）、易（賜）窶（鄭）七白（伯）、厥盧□又五十夫。易（賜）宜庶人六百又□六夫」。宜侯矢揚王休、乍（作）虞公父丁尊彝。
- これ四月、辰は丁未に在り。王は武王・成王の伐てる商図を省し、延して東国の図を省す。王は宜に立ち、社に入り南嚮す。王は虞侯矢に命じて曰く「ああ、宜に侯となれ。●（きよ）鬯一卣・商瓚一□・彤弓一・彤矢百・旅弓十・旅矢千を賜う。土を賜う。その川は三百□、その□は百又廿、その宅邑は卅又五、その□百又卅なり。宜に在る王人、十又七姓を賜う。鄭の七伯、厥の盧□又五十夫を賜う。宜の庶人六百又□六夫を賜う。宜侯矢、王の休（たまもの）に揚（こた）えて、虞公父丁の尊彝を作る。

（『白川静著作集別巻金文通釈 1 下』平凡社、2004年、52番宜侯矢簋、等参照）

西周史の入門書・概説書（日本語を中心に）

- 佐藤信弥『周一理想化された古代王朝』（中公新書 2396）中央公論新社、2016 年
角道亮介「殷周時代の文字資料—甲骨文・金文」中国出土資料学会編『地下からの贈り物—新出土資料が語るいにしへの中国』（東方選書 46）東方書店、2014 年
角道亮介「西周時代」『中国百科—中国百科検定公式テキスト』めこん、2013 年
竹内康浩「戦う西周王朝」『中国王朝の起源を探る』山川出版社、2010 年
尾形勇・平勢隆郎『世界の歴史 2 中華文明の誕生』第 4 章（中公文庫 S22S）中央公論新社、2009 年
稲畑耕一郎監修／荻野友範・崎川隆訳（劉煒編／尹盛平著）『図説中国文明史 2 文明の原点』第 4 章～第 6 章、創元社、2007 年
小南一郎『古代中国—天命と青銅器』（諸文明の起源 5）京都大学学術出版会、2006 年
平勢隆郎『中国の歴史 02 都市国家から中華へ—殷周春秋戦国』講談社、2005 年
竹内康浩「西周」松丸道雄・池田温・斯波義信・神田信夫・濱下武志『世界歴史大系 中国史 1』山川出版社、2003 年
松丸道雄「殷周春秋史総説」松丸道雄・古賀登・永田英世・尾形勇・佐竹靖彦編『殷周秦漢時代史の基本問題』（中国史学の基本問題 1）汲古書院、2001 年
貝塚茂樹・伊藤道治『古代中国—原始・殷周・春秋戦国』第 7 章・第 8 章（講談社学術文庫）講談社、2000 年
小澤正人・谷豊信・西江清高『世界の考古学⑦中国の考古学』第 5 章～第 8 章（西江担当部分）同成社、1999 年
平勢隆郎「古代文明と邑制国家」尾形勇・岸本美緒編『新版世界各国史 3 中国史』山川出版社、1998 年
浅原達郎「古代国家の出現一般・西周時代」『アジアの歴史と文化①中国史—古代』同朋舎出版、1994 年
松丸道雄・永田英正『中国文明の成立』第 3 章（ビジュアル版 世界の歴史 5）講談社、1985 年
白川静『金文の世界—殷周社会史』（東洋文庫 184）平凡社、1971 年

[参考文献]

- 夏商周断代工程专家组『夏商周断代工程 1996-2000 年階段成果報告（簡本）』世界図書出版公司、2000 年
林巳奈夫『殷周時代青銅器の研究』本文編・図版編（殷周青銅器綜覧 1）吉川弘文館、1984 年
林巳奈夫『殷周時代青銅器紋様の研究』（殷周青銅器綜覧 2）吉川弘文館 1986 年
王世民・陳公柔・張長寿『西周青銅器分期断代研究』文物出版社、1999 年
松井嘉徳「西周史の時期区分について」『史窓』第 68 号、2011 年
白川静『詩経—中国古代の歌謡』中公文庫、2002 年（初出中公新書、1970 年）
上海博物館商周青銅器銘文選編寫組編『商周青銅器銘文選』文物出版社、1986～1990 年
中国社会科学院考古研究所編『殷周金文集成（修訂増補本）』中華書局、2007 年
『白川静著作集 別卷金文通釈』1 上下、2、3 上下、4～7、平凡社、2004～2005 年
吳鎮烽編『商周青銅器銘文暨図像集成』上海古籍出版社、2012 年

東京学芸大学個人研究員の佐々木です。研究員という立場上、少し専門的な内容をお話しします。そこで趣旨を先に申し上げます。金文は現代の漢字の祖先です。ですから、金文の多くは現代の漢字に置き換えることが可能で、置き換えたその文字で文意を考えることができます。しかし、そうであるからこそ、その文字の意味を現代の感覚で解釈することには慎重でなければならない、ということをご理解いただきたいと思います。

金文研究の究極の目標は、銘文の内容を検討して、その銘文が本物かどうかを明らかにするとともに、器が作られた時期を確定することです。この作業を編年あるいは断代といいます。編年ないし断代は、西周史を再構築するためにも不可欠な作業なのですが、特定の周王に編年できる器はごく少数で、大部分の器は、西周時代を3区分、ないしは4区分して、そのどこかに編年するのが一般的です。どの周王で区分の線引きをするかは、今日なお定まっていません。

では、どのようにして器を編年するかというと、大きく3つの方法があります。

- ①考古学的アプローチ（器の型・紋様）
- ②歴史学的アプローチ（銘文の内容、銘文中の暦・人名）
- ③文字学的アプローチ（字形の変遷）

で、これらの手法を複合的に用いて判断します。具体的に言うと、器の形状や紋様と、銘文とを対比しながら、総合的にどの時期の器かを判断するのです。器が偽物なら銘文も間違いなく偽物です。しかし、器が本物であっても銘文は偽物ということがあります。発掘調査によって出土した器であればだいたい本物ですが、博物館や美術館などが購入した、いつ、どこで出土したのかよくわからない器は、真偽の判断も時期の判断も難しいことがほとんどです。本日は果敢にも、最近、ある博物館が手に入れた器を取り上げて、特にその銘文の真偽と意味とについて考えてみたいと思います。が、そのまえに確認しておかなければならないことがあります。

それは漢字のことです。漢字は誕生してから今日に至るまで、字形は変化しても廃れることなく、大陸・台湾に暮らす中国人はもとより、我われ日本人も日常的に用いています。ですから、金文のような今から3千年も前の文字であっても、多くは現代の漢字に置き換えることが可能で、置き換えたその文字で文意を理解することができます。ただ、それだからこそ、安易に、大昔の漢字の意味を現在用いている漢字あるいは熟語の意味で理解してしまうことがあるのです。金文ではありませんが、具体例を一つ挙げるなら、「質」という漢字がそうです。『戦国策』や『史記』といったテキストには、戦国時代（紀元前5世紀中頃～紀元前221年）に、しばしば、ある国が別のある国に質（ち）を差し出た、という記述があります。質となるのは、太子や公子です。質を差し出す目的は、質となった太子や公子を仲立ちとして友好的な国家間関係を築くことにありました。このように国家間で質となった人物を、私たちは「人質」と考えてしまいます。テキストには「人質」という熟語が出てこないにも関わらず、国家間で質となった人を一律に人質と訳し、質を仲立ちとした当時の国家間の交渉を人質外交と解釈するのです。

人質とは、言うまでもなく、権力がある個の肉親を拘束しその生死与奪をにぎることによって、その個自身、またはその個が所属する国家を、権力の意のままにしようとする形態です。ですが、質は人質であるという先入観を捨てて丁寧にテキストを読むと、質を受け入れた国が質となった者の生命を脅かすことによって、質を差し出した国を意のままに扱おうとした具体的事例を見いだすことができません。このように、テキストに見える「質」を人質と訳し、いわゆる人質として理解することは、当時の実態とかけ離れてしまっているのです。このことからわかるように、遠い過去のことばを安易に現代のことばとして理解することには慎重でなければなりません。であれば、戦国時代よりもさらに時代を遡る西周時代の金文を現代のことばに置き換えて、現代の感覚で理解したつもりになることは厳に慎まなければならないということがお分かりいただけると思います。

いよいよ本題です。西周時代の周王と諸侯との関係、すなわち歴史の教科書などが「西周封建制」と呼ぶ政治体制をどのように理解するかは西周史研究の最大のテーマの一つです。紀元前 11 世紀の後半に、いわゆる殷周革命によって殷を倒した周は、一族や功績のあった者に土地を分け与えて、一国の君主としました。ことばの意味としては、この行為が封建なのですが、封建した周王と封建された諸侯との関係はふつう支配・従属の関係であったと考えがちです。支配ということばは上位から下位への一方的な強制をイメージさせます。また、従属ということばは何らかの力に屈服することをイメージさせます。つまり、西周時代、周王は強権的に諸侯国を制御していたと考えるのです。こういった考え方を裏づける漢字の一つが「監」です。

監という文字の金文は、資料一に列挙したように、皿と臥とで構成されています。さらに細かく言うと、臥は眼の形である臣と人とで構成されています。つまり、水を盛った皿の中を人がのぞき込む形なので、「目」の形はどれも下向き・縦長であることが大きな特徴です（ちなみに、器が金属製であることを明示する金偏がつくと鑑となります）。動詞の訓読みが「みる」であることから、金文でも動詞の場合はふつう“監督する・監視する”の意味で理解します。中国古代の「監」といえば、三監、あるいは三監の乱を思い浮かべる方もいらっしゃるのではないのでしょうか。この三監もやはり、周が前王朝の殷の伝統を受け継ぐ人々を「監視」させた諸侯の総称として今に伝わっています。三監の実体については近年議論が盛んで、それはそれで大変面白いのですが、今回は、この「監」の字をめぐって、北京の中国国家博物館が 2013 年にコレクションした鄂監殷（がくかんき）を取り上げます。

資料二を御覧ください。殷というのは、穀物を入れて神様にささげる容器のことです。銘文の意味は、

鄂監が父辛（ふしん）をお祭りするための器を作った。

と理解して問題ないでしょう。この器を紹介した中国国家博物館の田率さんによると、器は西周初期（初代の武王・2代の成王・3代の康王）に流行した形状であり、銘文の文字も「作・父・辛・宝」などの書き方が西周初期の典型なので、成王の時代に編年するのが適当で、どんなに時期を下げても成王・康王の交代期であろう、と考えています。この断代案が適当かどうかの検討はさておき、私がこの鄂監殷の銘文を一目見て違和感をおぼえたのは、他でもない「監」の字形です。みなさんも資料一と比較してみてください。

いかがでしょうか。さきほど金文の監という字について、「水を盛った皿の中を人がの

ぞき込む形なので、目の形はどれも下向き・縦長であることが大きな特徴」であるといいました。ところが、この器の文字は明らかに目が横向き・横長の形状で、資料一に挙げた監の字形と合いません。このような字形の不一致を根拠として、この文字は書き誤りで、したがって銘文は偽物であると考え人もいます。同じような違和感をもつ人はいるものなのです。

たしかに、監の一字だけを見れば銘文は偽物であると考えられそうです。しかし、田率さんがいうように「作・父・辛・宝」といった文字の書き方が西周初期の典型であるのに、「監」の一字だけを書き誤るというようなことがあるのでしょうか。私はまずないと思います。では、この字形は何なのか。

私はしばらく考えて、ようやくこの「監」はむしろ殷の甲骨文字の字形に近い、と思いつきました。資料三を御覧ください。監の字が見える甲骨片と、監の字だけを切り取りつて拡大し見やすいように色を反転したものです。また、資料四には、甲骨文字の監の字形が列挙してあります。資料三に挙げた「監」の字は、より西周時代に近い第三期（第25代の廩辛、26代の康丁の時代。ちなみに、最後の殷王、紂〔甲骨文では帝辛〕は30代・第五期）の甲骨文字で、目の形状がどちらかといえば横向き・横長です。先ほど紹介したように、西周初期という田率さんの断代が間違いないなら、この器の銘文はいまだ殷の文字の伝統を受け継ぐ者の手によって書かれたのではないか。というのも、西周初期の「作・父・辛・宝」といった文字は、殷の金文の字形と大差ないからです。さらに、「父辛」のように十干を使った名称は、殷系の諸族の特徴であることも、この器を作ったのが周の世にあってなお殷の伝統を強く受け継ぐ者であることを物語っています。

以上のように考えてはみたものの、そうであるとなかなか断言できないことも事実です。資料五を御覧下さい。監祖丁觶（かんそていし）という青銅器の銘文です。右側に大きく見えるのが「監」の字です。下向き・縦長の目の形状は資料一に挙げた「監」の字形と共通しています。監祖丁觶に見える「監」の字は、今のところ、唯一の殷金文とされるものですが、これを西周金文と考える人もいます。もし、通説のとおり監祖丁觶の銘文が殷金文であれば、これまで述べた私の仮説は修正が必要です。今後、確実な殷金文に「監」の字が現れれば、それと比較することによって、鄂監殷の「監」の字形についてさらに考察を深めることができるはずです。それまで、鄂監殷の銘文が本物か偽物かという判断は保留せざるを得ません。もちろん、器が偽物であると断定できれば、四の五の言わなくても銘文も偽物なのですが。

以上、銘文の真偽についてお話ししました。

さて、本当に重要なのは「鄂監」の解釈です。鄂監殷の銘文がたとい偽物であったとしても、「何とか監」という銘をもつ青銅器がすでにいくつか存在するからです。たとえば、資料一の、右側二つ目の応監甗（おうかんげん）もその一つで、これは出土品です。参考資料として応監甗の写真と銘文を挙げておきました。この「何とか監」は西周時代に「監国」という制度が存在したことの証拠であると考えられています。一般の理解では、監国とは、読んで字のごとく、周王が諸侯国を監督・監視するシステムであるということになっています。「監」は監督・監視の監であり、お目付役であるという共通の理解があるからです。「何とか監」という銘文の「何とか」が、地名であり、国の名であることは間違いあ

りません。応も鄂も国の名です。そこで、「何とか監」における国と監との関係をどう考えるか、言い換えれば、「何とか」の国は、監視する側か、それとも監視される側かという解釈の違いが生じます。「鄂監」を例として言えば、①周王の命令で他国を監視する役職に就いた鄂の君主という解釈（鄂が監視する）と、②周王が鄂を監視するために派遣した周王直属の役人という解釈（鄂を監視する）とがあるのです。どちらの場合も、周王が諸侯国の動向を監視するという状況に違いはありません。監国を周王の支配システムの一つと考えるのです。こういった解釈の根底に、「監」は監督・監視の監であるという共通の理解があることは改めて言うまでもありません。

このように、監国は、西周王朝の支配システムの一つとして議論されていますが、「監国」という熟語自体は、金文はもとより、西周時代のことを伝えるテキストにも見えません。監国という熟語が初めて現れるのは『春秋左氏伝』というテキストです。資料六を御覧ください。春秋初期の紀元前 660 年、晋という国の猷侯（けんこう）という君主が大子の申生（しんせい）に軍を率いさせようとしたとき、これを諫めた里克（りこく）という臣下のことばに、

大子というのは、祖先や土地などの神々に穀物をお供えして、君主の食事に気を配る者であり、君主が戦争で国外にあるときは、国に残って監国として留守を預かり、ほかに留守を預かる者があるときは、撫軍として君主に従って戦場に出るものであるとあります。この「君行けば則ち守り、守り有れば則ち従ふ。従ふを撫軍と曰ひ、守るを監国と曰ふ」というのが「監国」という熟語の初見です。注目してほしいのは、その下の「古の制なり」というフレーズです。この「古の制なり」はもともと里克の発言の一部ではありません。里克の発言をテキストで読んだ後の時代の人が、里克の「君行けば則ち守り、守り有れば則ち従ふ。従ふを撫軍と曰ひ、守るを監国と曰ふ」という部分について、それを「古い制度である」とコメントしたものです。漢の武帝の晩年に成立した『史記』には、「古の制なり」を含む『春秋左氏伝』の記述がほぼそのまま里克の発言として引用されているので、司馬遷（あるいは父親の司馬談かもしれませんが）が『史記』の種本としたテキストには、すでに「古の制なり」というフレーズのあったことがわかります。であれば、里克の発言を記録したテキストに「古の制なり」が書き込まれたのは、どんなに遅くとも秦の始皇帝による中国統一の前後ということになります。つまり、戦国時代の終わり頃から見ても、里克が述べる「監国」の内容を「今はそうでなくなった、過去の制度である」とコメントしているのです。このことから、監国という制度は春秋時代の制度であったことがわかります。しかも、「守るを監国と曰ふ」というように、君主が戦争で国外にいる留守を太子が預かるという意味なのですから、「監」の字を安易に監視といった高圧的な意味にイメージしてはいけないことをはっきりと示しているのです。

春秋時代、とくにその初期というのは、実力を失った周王に代わって、有力の諸侯が西周時代のシステムにのっとりつつ諸国併存の社会秩序を維持しようとした時代です。もちろん、有力諸侯が西周時代のシステムから逸脱したり（晋の文公）、システムそのものを変更しようとしたり（楚の荘王）したことはありました。しかし、基本は西周時代の周王の政治方式を踏襲しています。したがって、春秋時代の監国という制度も、春秋時代に生まれた新しいシステムではなく、むしろ西周時代のシステムを受け継いだものであると考えるべきです。

そこで、改めて春秋時代の監国について考えてみましょう。春秋時代の監国とは、君主が戦争に行ったとき、太子が国にとどまって国を守ることでした。太子が君主の代理として国政を担ったのです。戦争で君主と太子の両者を失うリスクを避けるとともに、太子に後詰めの役割を任せるためでもあります。国を滅ぼさずに維持してゆくための自力救済であったことが明らかです。春秋時代に晋という一諸侯国がこのような自力救済を講じなければならなかったのは、すでに述べたように、春秋時代には周王の力が衰えて周王に存続の保障を期待できなくなっていたからです。ということは、逆に言えば、春秋時代のこのような存続のための自力救済は、西周時代の周王の政治方式を受け継いだものということになります。なぜなら、西周時代の周王の政治は、諸侯国の存続を保障し王朝という組織体を損なうことなく維持することを第一の目的としたからです。

こうした観点から今一度、鄂監という熟語を見れば、この監も、国家存続の措置として君主に代わって政治を行うという意味に考えられるはずです。また、そこには何らかの形で周王が関与しているはずです。したがって、鄂監とは、具体的にいえば、鄂という国に適当な後継者がいなかったり、後継者がいたとしても幼少で政治能力がなかったりした場合に、鄂の政治が混乱したり停滞したりすることのないよう、周王が臨時の措置として鄂に派遣し君主の代理として政治をとらせた者ということになると思います。この措置は何よりも、鄂の国内が混乱し弱体化することのないようにすることが目的であって、決して鄂が周王に対して敵対行動を取ることをしないよう監視するためではないのです。

私がこのように監を周王が派遣した君主の代理と考えるのには、もう一つ理由があります。資料七を御覧下さい。仲儀父殷（ちゅうぎほき）の銘文です。

仲儀父が、儀という人物を諸侯や諸監のもとに派遣した。
とあるように、銘文に諸侯と諸監とを併記し、ともに儀という人物の派遣対象となっています。諸侯と併記され諸侯と同等の扱いを受けている以上、諸監は君主とほぼ対等の地位にあると考えなければなりません。

西周王朝とはそもそも、周を中心として斉や晋や魯といった独立性の強い国々が連合した組織体です。ですから、周王であってもふだんは諸侯の政治に介入しないというのが基本的なスタンスでした。しかし、諸侯国に何らかの問題が生じた場合、周王は秩序を回復するためにその混乱に介入し、諸侯の政治を輔佐する人物を派遣したりしました。それは、王朝を構成する諸侯国の存続を保障し、王朝組織体を維持することが周王の務めであったからです。これらの事実から、私は、監とは、①君主の代理として周王が派遣する臨時的な役職である、したがって、②対外的には君主とほぼ対等の地位にある、と考えるのです。周王から派遣された君主の代理ですから、適当な血縁者が新君となれば、その時点で、監はお役御免となります。監から新君への政権の委譲といえますか政権の交代といえますか、言い方はいずれにせよ、それは、血縁者を君主の代理とした場合と違ってスムーズに混乱なく行われたはずです。

「何とか監」の銘をもつ青銅器は、西周初期の応監鬲から、西周晩期の仲儀父殷まで、ほぼ300年間の西周時代全般に編年されています。また、仲儀父殷に「諸監」とあったように同時期に複数人の監のいたことがわかります。しかし、それは監が西周時代の常設の制度であったということではなく、監という臨時の措置が西周時代に広く行われたことを

示していると考えたほうがいいと思います。

そろそろ述べてきたことをまとめることにします。西周時代の監とは、周王から派遣されて君主の代理として国を治める者で、派遣先の国名の下に「監」を付けて「応監・鄂監」のように名乗ったのでしょう。それらの監が在任中に自分のご先祖さまをお祀りするために作った器が応監甗であり、鄂監斚なのだと思います。

本日は、「西周金文の基本問題」というテーマのもと、同じ漢字であるがゆえに古い時代の文字の意味を現代の感覚で理解してしまう危険性について、とくに「監」の字を取り上げて、金文の「監」を安易に監督・監視の監と考えてはならないということをお話ししました。

【参考文献】

- ・田率「新見鄂監簋与西周監国制度」(『江漢考古』2015年第1期)
- ・佐々木研太「戦国期の「質」の機能—『戦国策』所見の「空質」の解釈を媒介として—」(『史潮』新43号、1998年)
- ・佐々木研太「周王の諸国統治の方策とその展開の形態」(『中国出土資料研究』第21号、2017年)
- ・王沛姫「新出三件两周具銘銅器商榷」(王巍・杜金鵬編『三代考古(六)』2016年)
- ・田村和親「『左氏伝』の「古之制也」の類型」(『二松学舎大学論集』第39号、1996年)
- ・杜勇「従三監看武王大分封的性質」(『人文雑誌』1999年第1期)

「某監」銘銅器集成(☆は、出土品)

○西周初期

應監鼎「應監作旅」。

應監甗「應監作寶^隣彝」。☆

鄂監斚「鄂監作父辛寶彝」。

濮監斚「濮監作^隣斚」。☆

尙監鼎「尙監作寶^隣彝」。☆

○西周中期

蘭監引鼎「蘭監引作父己寶鬯彝」。

○西周晚期

叔趙父卣「叔趙父作旅卣、其寶用。榮監」。☆

應監甗「應監作寶^隣彝、其萬年永用」。

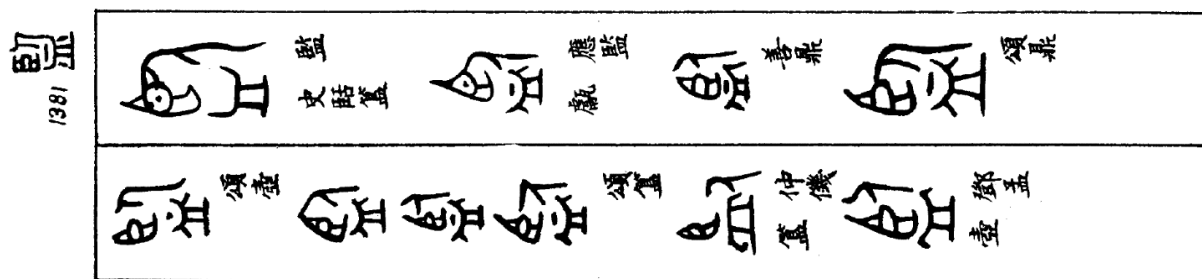
仲機父斚「仲機父使機使于諸侯・諸監、用卣償作丁寶斚」。

「西周金文の基本問題」資料（平成二十九年八月二十三日）

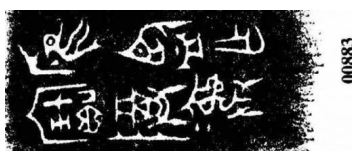
【作成・佐々木】

○資料一

容庚編著『金文編』（中華書局、一九八五年、巻八、五八二頁）



・参考資料「監監」(『殷周金文集成』八八三、七二八頁。西周初期)



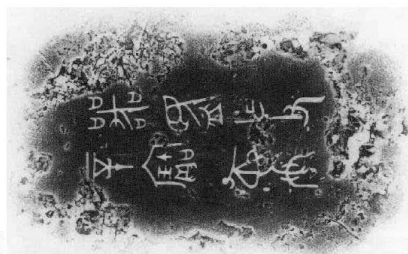
○資料二

田率「新見鄂監簋与西周監国制度」(『江漢考古』二〇一五年第一期、六十八頁)



鄂監簋

图版一



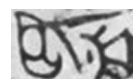
鄂監簋器銘拓片

拓片二



鄂監簋蓋銘拓片

拓片一



「監」?

【銘文】

監(鄂) 監乍(作)父
辛寶彝。

【訓読】

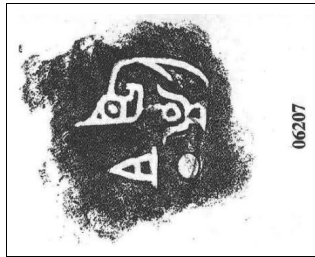
鄂監、父辛の寶彝を作る。

「鄂監」の解釈

- ① 周王の命令で他国を監視する役職に就いた鄂の君主（鄂が監視する）
- ② 周王が鄂を監視するために派遣した周王直属の役人（鄂を監視する）

○資料五

監祖丁罈（『殷周金文集成』六二〇七、三七六一頁。殷末 or 周初）



【銘文】

監

且 (祖) 丁

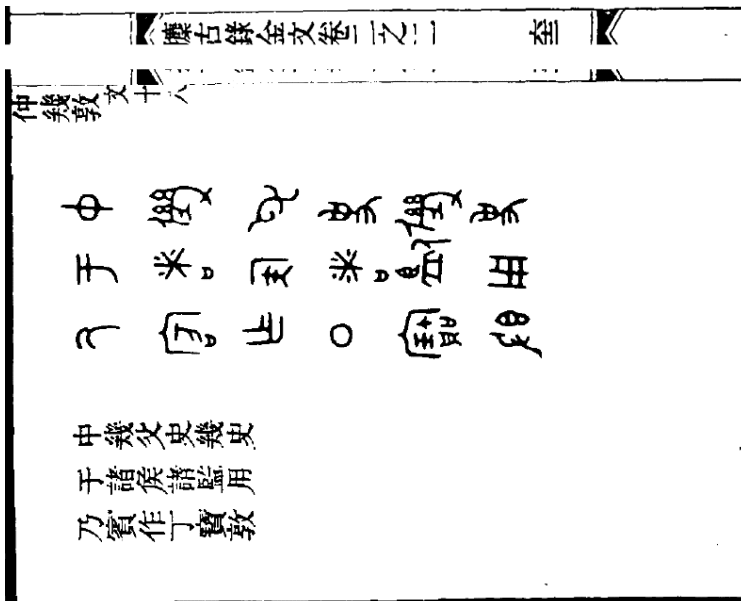
○資料六

『春秋左氏伝』閔公二年（紀元前六六〇年）

晋侯、太子の申生をして東山の臯落氏を伐たしめんとす。里克、諫めて曰く「太子は冢祀社稷の黍盛を奉じて、以て朝夕に君の膳を視る者なり。故に冢子と曰ふ。君行けば則ち〔国を〕守り、〔国に〕守り有らば則ち〔君に〕従ふ。従ふを撫軍と曰ひ、守るを監国と曰ふ。古の制なり。夫れ師を帥ゐ、専ら謀を行ひ、軍旅に誓ふは、君と国政との図る所なり。太子の事に非ざるなり。師は命を制するに在るのみ。命を稟くれば則ち威あらず、命を専らにすれば則ち不孝なり。故に君の嗣適は、以て師を帥ゐしむべからず。君は其の官を失ひ、師を帥ゐて威あらず。將た焉んぞ之を用ゐん」と。

○資料七

仲幾父殷（清）吳式芬『攔古錄金文』卷二之二「仲幾敦」、六十二頁。西周晚期）



仲幾敦 文十八

中 史 于 米 于 米 于 米 于 米

中幾父史幾史
于諸侯諸監用
乃實作丁寶敦

【訓読】

仲幾父、幾をして諸侯・諸監に使ひせしむ。（※銘文の「史」は「使（使役・使者）」の意）

西周王朝をめぐる最新の考古学調査

【作成：山本 堯】

1. はじめに

西周金文に対する研究は、すでに 1000 年を超える研究の蓄積を持つが、それらが記された青銅器に対する考古学的研究は、まだ始まって 100 年にも満たないほどの歴史しかない。またそのような青銅器を残した王朝の姿は、毎年行われている考古学的調査によって解明される途上にあると言ってよい。ここでは、中国大陸で行われている考古学調査の沿革と最新の成果を参照しながら、西周金文とその時代について考古学の立場から紹介する。その際に着目するのは、青銅器の形態とその変化であり、「モノ」の変化を捉える型式学の手法に依拠することで、歴史学や古文字学とは異なる観点から西周時代を見てみたい。

2. 殷墟遺跡の発見とその意義

中国における近代考古学の開始を考えるうえで、殷墟遺跡の発見と調査を避けて通ることとはできない。殷代の文字である甲骨文が偶然によって発見されたという著名なエピソードには諸説あるようだが、清末から民国にかけての中国において出土資料に対する認識が様々な形で高まっていき、その後押しを受ける形で 1928 年の殷墟遺跡の発見と調査が行われたことには疑いない。現在の河南省安陽市に位置する殷墟遺跡は、殷王朝最後の都とされる遺跡であり、1928 年から当時の中央研究院によって発掘調査が行われた。この調査によって大規模な宮殿建築址や大墓が発見されたこともさることながら、重要なのは出土した甲骨文によって、司馬遷の『史記』に記された殷王朝の系譜の正しさがおおむね実証されたことであつた。当時の歴史学界では、殷周時代とそれ以前の歴史は後世によって作り上げられた虚構の伝説に過ぎないとする見解が主流を占めており、殷墟遺跡の発見はこうした定説を覆し、殷王朝の実在性を証明することとなった。殷周時代はもはや単なる虚構の伝説などではなく、考古学という新たな学問領域によって実証されるべき研究対象となったのである。

3. 周原遺跡の調査と沿革

殷墟遺跡の調査が行われていた 1930 年代、中央研究院の徐旭生らによって陝西省一帯で考古学調査が行われたが、その目的の一つは西周王朝を建立した周族とその文化を探ることであつた。その後、同じく中央研究院の石璋如が陝西省岐山県、扶風県一帯を調査するが、それは周の文王の祖父にあたる古公亶父が、周族を率いて岐山の麓に「周原」という都を置いたとする『史記』の記述を念頭に置いたものであつたに違いない。殷墟遺跡の発見と調査によって殷王朝の実在が証明された次に、周王朝が調査の対象となったのは必然的帰結であろう。

岐山県、扶風県一帯の調査はその後断続的に行われていったが、大きく進展があったのは 70 年代に入ってからである。北京大学が 1976 年から 77 年にかけて行った大規模な調査によって、鳳雛村、召陳村において大型の宮殿建築址が発見された。特に鳳雛で発見された甲組建築遺構からは甲骨文が発見され、その中には殷王朝最後の王である紂王の父親にあたる帝乙の名が記されていた。この甲骨が宮殿建築址に伴うものであるとするならば、建築址の上限年代は殷代にまで遡り、殷王朝がまだ存在していた時期の岐山一帯に周族が本拠地を築いていたとする、『史記』の記述を裏付けることとなる。殷墟遺跡と同じく、文字史料と考古学調査の成果を結びつけることにより、文献上に現れる「周原」の存在を証明しようとする言説が中国人考古学者の間に目立っているが、先述の甲骨文が果たして本当に甲組建築址に伴うものであるか否かには疑問も残るため、宮殿建築が岐山一帯にいつ現れたのかについては、なお今後の調査成果を待たなければならない。

2000 年代以降も北京大学を中心として周原遺跡の発掘調査は進められ、様々な性質の遺構が存在していたことが明らかにされている。宮殿建築や墓地をはじめとして、骨角器や青銅器など各種手工業生産に関わる工房址などが発掘されており、周原遺跡全体が地点ごとに異なる機能を持つ都市的性格を帯びたものであったことが明らかとなってきた。このことは、少なくとも西周時代においてこの地に西周王朝の中心的拠点が存在していたことを裏付けていると言えるが、その年代が殷王朝併行期にまで遡るかどうかは現在のところ不明とせざるを得ない。

4. 宝鶏石鼓山墓地と出土青銅器

2013 年、陝西省宝鶏市石鼓山において大規模な墓葬が発見され、そこには大量の青銅器が副葬されていた。出土した青銅器は大型の優品が多数含まれており、被葬者が有力な人物であったことを推測させるに十分であるが、宝鶏においてこのような大量の青銅器が出土するのは初めてのことでなく、実は過去に似たような事例が存在する。1900 年代、宝鶏戴家湾で大規模な盗掘が行われ、そこで出土した青銅器は大部分が海外へと流出した。現在、ニューヨークのメトロポリタン美術館が戴家湾出土青銅器を所蔵しているが、石鼓山西周墓出土の青銅器と比較すると、器形・紋様・器種構成が極めて似通っていることが確認できる。そしてそのスタイルは、ちょうど殷王朝から西周王朝への交替期に位置付けられるものであり、近年の殷墟孝民屯での発掘調査で出土した青銅器の鋳型の紋様と特徴が一致するものが複数含まれている。このことは、殷王朝の滅亡に伴い、殷墟で青銅器製作に携わっていた工人が何らかの形で陝西の地に移住させられたか、あるいは西周王朝が殷墟の青銅器を戦利品として持ち帰った可能性が考えられる。石鼓山と戴家湾出土の青銅器は、殷周両王朝の交替期という激動の時代を物語る重要な資料的価値を有するものと言えるのである。

また石鼓山出土青銅器には、鄂監簋に類似した器形を持つ簋が見られる。鄂監簋は胴部上半に簡素な紋様帯が一条施されるのみであるのに対し、石鼓山出土簋は全身に鳥を象った紋様が表されている点で大きく異なっているが、左右の把手の下部に付けられた C 字形の

飾りの形状が共通していることが看取される。殷末から周初にかけて製作された簋の把手には、このような C 字形の飾が多く見られるが、その形態にはバリエーションが見られる。当初は切れ込みの深い C 字形を呈していたが、徐々にその装飾性が形骸化していき、最終的に板状のものになると考えるならば、装飾が徐々にルジメントとなって形骸化するという型式学的前提ともうまく合致し、その変化は時期差を表すものと考えることができる。鄂監簋と石鼓山出土簋の把手下部の飾りが共通することは、両者の製作年代が近いことを示唆し、鄂監簋銘文に記されているような西周王朝による監の派遣や、それによる鄂（噩）国の保護といった施策は、石鼓山墓地が造営された殷末周初の動乱期の政治的状況を反映したものと捉えることができるかもしれない。西周金文の内容に加えて、それが記された青銅器自体に対する考古学的な分析を行っていくことで、銘文のもつ史料価値をより多角的な見地から位置付けることが可能となる。中国大陸で今も行われ続けている考古学調査が、西周金文の世界をより多角的に理解していくうえで、より不可欠なものとなっていくであろう。

参考文献

- 内田純子 2010 「商周青銅器の紋様・装飾研究」『中国考古学』第 10 号
- 徐天進ほか 2015 「周原遺址鳳雛三号基址 2014 年発掘簡報」『中国国家博物館館刊』2015 年第 7 期
- 陝西周原考古隊 1979a 「陝西岐山鳳雛村西周建築基址発掘報告」『文物』1979 年第 10 期
- 陝西周原考古隊 1979b 「陝西岐山鳳雛村発掘発現周初甲骨文」『文物』1979 年第 10 期
- 陝西省考古研究院 2016 「陝西宝鶏石鼓山商周墓地 M4 発掘簡報」『文物』2016 年第 1 期
- 陝西省考古研究院ほか編 2014 『周野鹿鳴 宝鶏石鼓山西周貴族墓出土青銅器』上海書画出版社
- 石鼓山考古隊 2013 「陝西省宝鶏市石鼓山西周墓」『考古与文物』2013 年第 1 期
- 中国社会科学院考古研究所編 1994 『殷墟の発現与研究』科学出版社

最新をめぐって 西周王朝の考古学調査

東京学芸大学公開講座

2017年8月23日

山本 堯



考古学者は何を見ているのか？

- 考古学は過去の社会を研究対象とする点で、歴史学（文献史学）と似通った興味関心をもつ学問分野と言える。

□ 歴史学とはどこが違うのか？

- 考古学者は過去の人類が残したモノ＝物質文化を研究対象とし、過去の社会を考察していくことを目的としている。

□ 歴史学の研究対象は基本的にテキスト＝文献

- 考古学者が扱う資料は発掘調査で出土したもの（遺物）がメイン



型式学 (TYPOLOGY)

- 考古学が研究対象とする時代には、文字の無い時代（先史時代）も含まれる。
□ 文字に頼らずに時間軸を設定しなければならない
- モノの形の変化に着目することで、変化の順番（相対編年）を決定していき、それに基づいて歴史復元のための時間軸とする。
- モノの形の変化を説明するための方法論を「型式学 (Typology)」と呼ぶ。



西周王朝をめぐる考古学

- 西周王朝が殷王朝を打倒し、再び天下を統一する「殷周革命」は『史記』などの歴史書にも記され、『封神演義』として人口に膾炙している。
- 文献の中の殷周時代の実態は、中国大陆で急速に進む発掘調査によって、徐々に明らかになりつつある。
- 文献史学と考古学の境界としての西周時代





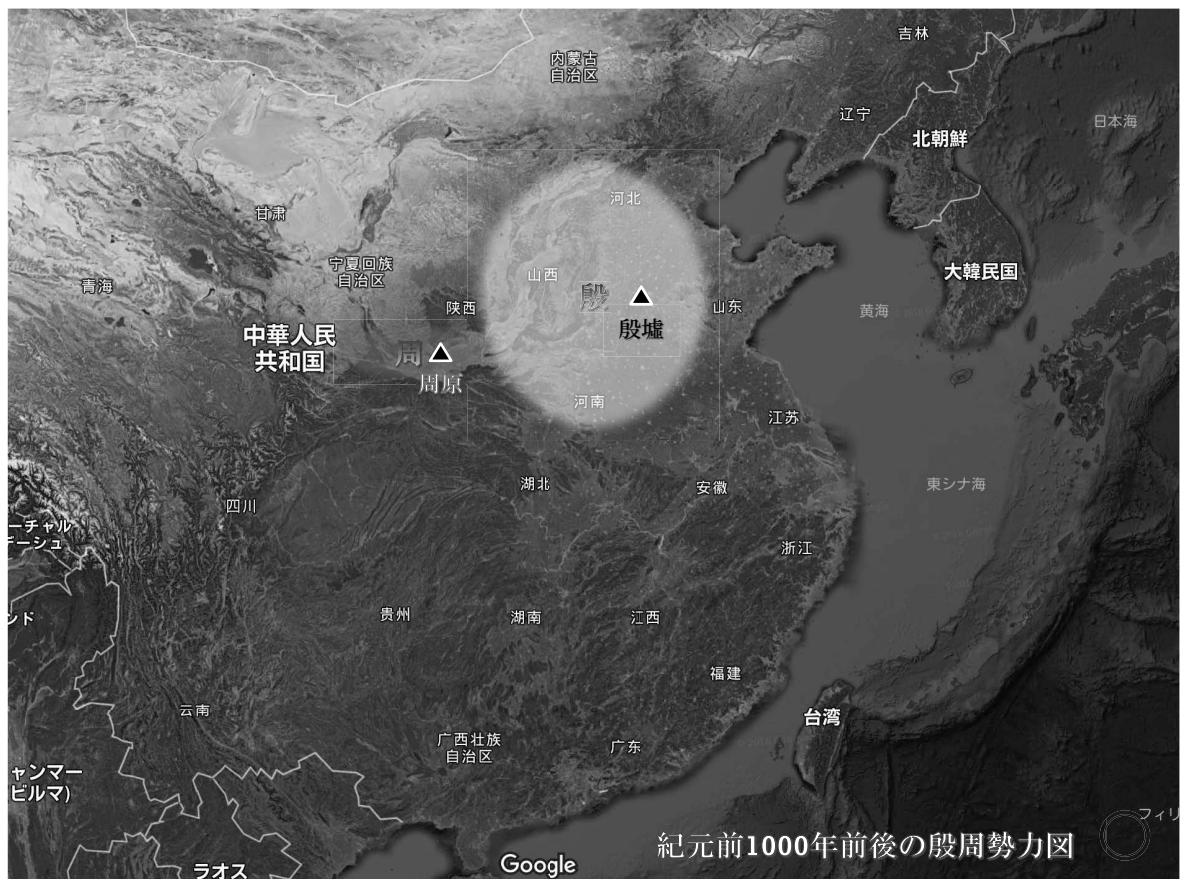
殷墟発掘の成果

- 殷墟遺跡の発掘調査の成果（王墓、宮殿の発見）、および殷墟から出土した甲骨文字の内容によって、『史記』などに記された殷王朝の存在が歴史的事実であることが確認された。

☐ 文献史料と考古資料が組み合わさることで殷王朝の存在を証明することができた

- 多くの文献に記され、擬古派の学者たちによって虚構とされてきた夏商周の歴史が史実であった可能性。

☐ 検証を行うためには文献史学と考古学の対話が必要



周原遺跡における近年の発掘調査とその進展

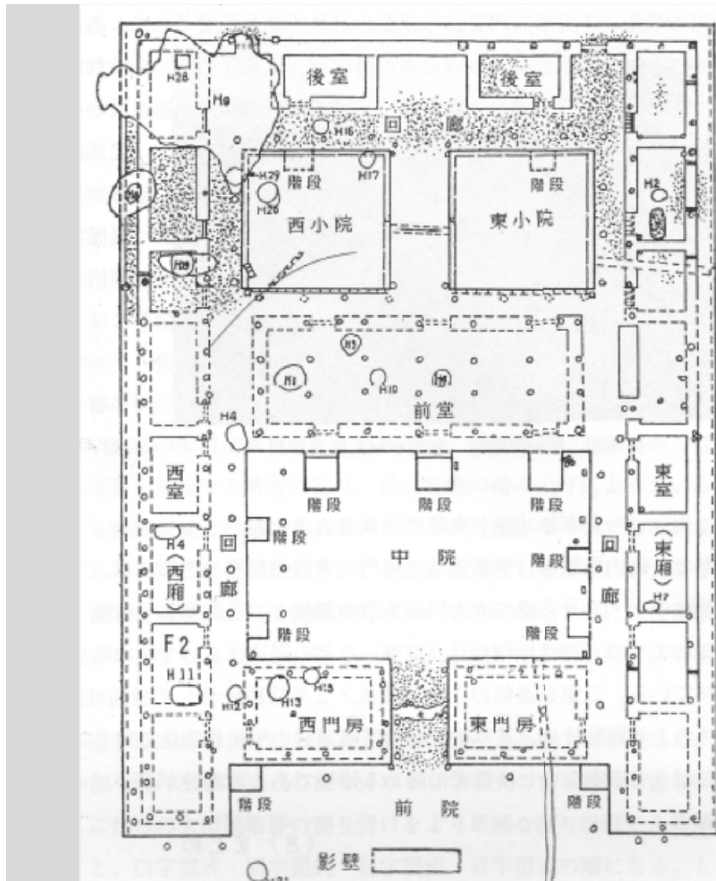
- 『史記』によれば、「周人」は今の陝西省岐山県を中心に活動していたとされている。
 - 50年代から伝説の「周原」を求めて考古学調査が行われる
- 70年代以降、組織的な発掘調査が進展し、先周文化や西周時代の様々な遺跡・遺構が発見され、徐々にその実像が明らかになりつつある。
- 考古学から見た「先周文化」の実態はどのようなものか？



周原遺跡群と岐山

『史記』「周本紀」：踰梁山、止于岐下。





鳳雛村甲組建築基壇

- ・ 1976年に陝西周原考古隊によって発掘調査が行われる
- ・ H11から大量の甲骨の発見。中には殷王にまつわる記載あり。
- ・ 西周前期に宮殿として機能していたと考えられている。

周原遺跡の性格と年代

- 周原遺跡では大型建築址や青銅器墓、各種手工業生産の工房跡が発見されており、様々な機能が集約した「都市」的性格の強い遺跡であることが分かる。

☐ 殷墟遺跡との類似性

- 岐山一帯に周人が活動の拠点を置いていたとする文献記載を裏付けるものと言える。
- ただし年代に問題あり。今まで発見されている各種遺構は西周中期以降が中心。先周文化期に都市機能が備わっていたかどうかは現在確認できない。

宝鶏石鼓山西周墓地

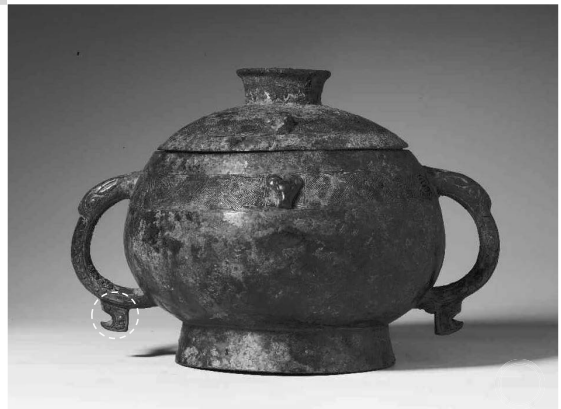
- 2013年に陝西省宝鶏市にて大型の西周時代の墓が発見され、大量に副葬された青銅器が出土した。
- 青銅器は殷墟のスタイルを持つものと西周時代のスタイルをもつものが混在している。
 - 非常によく似た青銅器が海外の博物館に収蔵されている
- 西周王朝が殷王朝を打倒した時に、戦利品として持ち帰った青銅器が石鼓山に副葬されたのではないかと？
 - 西周時代のごく初期に造営された可能性が強い





宝鷄石鼓山4号墓出土簋

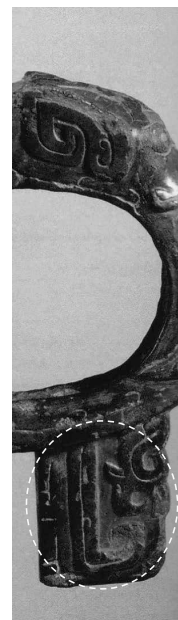
鄂監簋



殷末周初



西周前期



西周中期



まとめ

- 最新の考古学調査によって、殷周王朝交替期の様相が徐々に明らかになってきている。
- 石鼓山から出土する青銅器は、スタイルから見てちょうど王朝交替直後の混乱の中で製作された可能性が高いと考えられる。
- 鄂監簋もほぼ同じ時期に製作されたと考えられ、銘文の内容は西周王朝成立直後の不安定な政情を反映したものかもしれない。

□ 文献学と考古学を融合することで、西周王朝の実態を明らかにすることができる



第 2 部

西周時代の文字

（金文）で年賀状を
書いてみよう

公開講座 午後の部のスケジュール

時間	事項	備考
13:20～ 13:25	I 午後のアクティビティとその流れに関する説明（下田）	
13:25～ 13:40	II 金文で年賀状を作るにあたってのポイント説明（佐々木）	
13:40～ 13:50	III 本日用意の工具書、参考ウェブサイト、パソコン使用、年賀状作成例（下田）	
13:50～ 14:30	IV 文字の決定、字書を引く 文字を決定し、字書類を引く。また字書サイトを調べる。	※余力のある方は時間の範囲内で複数の文案や図案を考えていただいてもかまわない。
14:40～ 15:20	V 図案作成 トレース紙でなぞってみる、金文・イラストを含めた年賀状の図案を作成する。 トレース紙でなぞった文字の加工は私自身はできないが、イラストレーター等活用できる方はよりセンスのある年賀状作成につとめる。	※図案作成には、インターネット接続により、年賀状作成サイトや無料イラストサイト等を活用。
15:25～ 15:40	VI 共有 各グループ・個人で作成した「作品」を共有する。	※1人、1グループ、各1～2分で図案作成にこめた思いや考えを説明する。
15:40～ 15:55	VII アンケート 2種類のアンケートあり。 1つは、大学からの、全公開講座に対するアンケート。 もう一つは、私たちのためのアンケート。	※負担をかけることをお詫びする。

2017 年 8 月 23 日

【51】西周時代の文字（金文）で年賀状を書いてみよう

<本日用意の工具書>

高明・涂白奎編『古文字類編（増訂本）』上海古籍出版社、2008 年

高明編『古文字類編』中華書局、1980 年（本書は国内書でも『古文字類編－中華書局版』東方書店、1987 年として刊行）

徐中舒主編『漢語古文字字形表』四川人民出版社、1981 年

容庚編／張振林・馬國權摹補『金文編』中華書局、1985 年

白川静『字統（新訂・普及版）』平凡社、2007 年

<関連サイト>

漢典：大型漢和辞典として利用可能。説文解字・康熙字典等を調べられる

<http://www.zdic.net/>

漢語多効能字庫：字書としての利用のほか、各文字について小篆・甲骨・金文等を収録

<http://humanum.arts.cuhk.edu.hk/Lexis/lexi-mf/>

中華博物 金文字典：金文編をネット上で引くことができる

<http://images.gg-art.com/dictionary/jin.php>

中央研究院 漢籍全文資料庫：二十四史や十三經注疏等を検索できる

<http://hanji.sinica.edu.tw/>

中国哲学書電子化計画：漢籍中の言葉の検索と電子版の漢籍の閲覧が可能

<http://ctext.org/zh>

【51】西周時代の文字（金文）で年賀状を書いてみよう 担当講師によるアンケート

今後の講座の開発と改良に役立てるため、お手数ですが、アンケートへのご協力をお願いいたします。

① 今回の金文で年賀状を書くというアクティビティはいかがでしたか。

番号	回答
1	金文 難しいけれど、奥が深い。年賀状 引き付けられるタイトルです。
2	どのように加工して、年賀状になっていくのかわからなかったのですが、短い時間で皆さんの作品がそれぞれ楽しいものとなっていたのでよい時間をすごせたと思いました。
3	ネットで金文の形を探せるので、楽しかったです。授業でも活用してみたいです。
4	とにかく、お話がものすごくおもしろかったです。新しい発見で心の中でたくさんつぶやいていました。ありがとうございました。
5	金文の文字を具体的な作業で経験、知ることができる。身近な年賀状を作成することで実用的でもあった。
6	とてもおもしろいですし、興味深いです。年賀状作成は時期的にははやいとは思いません。
7	楽しかったです。
8	楽しかったです。

② 金文を活用したアクティビティとして、他にアイデア等ございましたら、ご記入下さい。

1	文字・歴史・考古学・デザイン、その他合体しての書物を出版して下さい。
2	金文を読んでみることをやってみたいです。何か規則的なものがあれば知りたい。
3	○文字を版画、ゴム印（消しゴムはんこ）、染めるなど。 ○色紙等実際に筆でかく。 ○ガラスに文字を切りぬいたものをはりつけ、微細な砂をふきつけて浮かび上げる（サンダーアート）。
4	時間が許せば、長めの文章を作る。
5	年賀状は毎年だすので、また年賀状でもいいと思います。

③ 金文（宜侯矢簋、頌鼎等）を実際に受講者と読む講座について、ご関心をお持ちですか。

1	非常に関心が有ります。
2	あります。監と質の解釈、大変興味深く面白かったです。勉強になりました。ありがとうございます。
3	読むのはちょっと難しいです。
4	あります。
5	漢字については、奥が深いので、専門家のお話が聞けて有益でした。

ご協力ありがとうございました。

以上

おわりに

下田氏から、夏の公開講座で西周金文を扱いたいから協力するよという話があったとき、私があまり深く考えずに金文で年賀状を書くというアイデアを出したのが、この講座のきっかけである。

文字どおり深く考えて提案したわけではなかった。だから、講座当日、いざ午後の作業を始めるに当たり、言いわけをしなければならなくなかった。「西周」金文に限定すると、年賀状の常套語である「賀正」や「謹賀新年」ですら書けないからである。

インターネット上で金文体の年賀状印刷とか金文体の「謹賀新年」のスタンプとかいった商品を見かけることがあるが、それらの文字は純然たる金文ではなく、よく見れば篆書であることが多い。そういった意味で、当初、わたくしたちの講座は大いに意味があると確信していた。ところが、実際に、年賀状に使う二字熟語・四字熟語を吟味すると、上記のように「西周」金文で書くことのできる見慣れた表現はごくわずかであることがわかったのである。たとえば、「謹」字は西周時代にはまだなく、当時は「堇」字を謹の意味で用いた。「謹」字が確認できる最も早い例は今のところ戦国末期の、いわゆる睡虎地秦簡である。また、「賀」字の出現は戦国時代（中山国金文）まで待たなければならない。わたくしたちが調べたところでは、「西周」金文で4字とも書けるのは、「新春萬福」「春光樂樂」「新春來福」「獻壽歲旦」「慶賀光春」「慶祥麗春」くらいしか見つけられなかった。

このような状況でありながら、受講者のみなさんが楽しんで思い思いに文字を選びトレースして年賀状の図案を完成させてゆく姿を見て、ほっとすると同時になんとなく申しわけない気持ちになったものである。来年度はこの失敗に鑑みて、春秋・戦国時代（東周時代）も含めた周金文で年賀状を書くという企画にしたいと考えている。

また、私が担当した「西周金文の基本問題」は、タイトル自体が壮大で私の手に余るし、始まってみなければ受講者もどのような内容なのか想像がつかないという難があったと思う。私は悩んだ末に、同じ漢字でも金文と現在とでは必ずしも意味が合致しない例として「監」字を取り上げることにしたが、ある文字に注目してその文字の金文での用法を考えるのであれば、年賀状に用いる吉祥語にするべきであったかと今は反省している。来年度は、「西周金文の基本問題」というタイトルはそのままであっても、1つの青銅器の銘文をじっくりと検討することにしたい。

最後に私事であるが、当日は学芸大学までの道中で気分が悪くなり、講座開始時には脂汗が出るほどであったが、受講者のみなさんの熱意のおかげで、話しながら具合が徐々によくなっていくのが実感できた。この点でも受講者のみなさんに感謝申し上げる次第である。

東京学芸大学個人研究員
佐々木 研太

平成29年度東京学芸大学公開講座記録
『西周金文に親しみ、活用する』

2018年 3 月30日発行

下田 誠・佐々木 研太 編

〒184-8501 東京都小金井市貫井北町 4-1-1
東京学芸大学 教員養成開発連携センター 下田研究室
Tel: 042-329-7777 Fax: 042-329-7903

印刷：有限会社サンプロセス
〒207-0012 東京都東大和市新堀 1-1435-29
Tel: 042-561-8810 Fax: 042-561-8813